

日本語中級前期の指導と課題

- SJ4-1 および SJ4-2 コースの試み -

加納 千恵子

要 旨

「一般日本語 SJ4-1」および「一般日本語 SJ4-2」は、300 時間程度の日本語既習者、すなわち中級前期の学習者を対象としており、非漢字圏学習者と漢字圏学習者が混在している 20～30 名程度のクラスである。このコースでは、教材として、『一般日本語 SJ4-1』および『一般日本語 SJ4-2』を使用し、大学生活において必要とされる中級のコミュニケーション能力を伸ばし、定着を図るための文型練習や表現練習を行っている。本稿では、初級から中級に移行する時期の課題を取り上げ、中級指導のポイントをまとめる。日本人学生ボランティアの授業への参加を積極的に呼びかけ、グループ活動を授業に取り入れること、学生の自律的学習を促すことなども指導のポイントであろう。

【キーワード】中級前期の学習者 中級指導のポイント グループ活動 自律的学習

Issues in Teaching Intermediate-low Level Learners: a report on “Standard Japanese SJ4-1 & SJ4-2”

KANO Chieko

【Abstract】“Standard Japanese SJ4-1 & SJ4-2” are Intermediate-low level courses for 20 to 30 students with and without kanji background, who have already studied approximately 300 hours of Japanese lessons. The classes focus on practicing sentence patterns and useful conversational expressions for university life to improve students' intermediate level communicative skills, using the main text “Standard Japanese SJ4-1 & SJ4-2”. In this paper, the author summarizes the essential points of teaching Intermediate-low level learners. It is thought to be essential to encourage group work with Japanese student volunteers in the class and to foster learner autonomy.

【Keywords】Intermediate-low level learners, essential points of teaching intermediate level, group work, learner autonomy

1. はじめに

初級レベルと中級レベルとは、その指導方法に大きな違いが存在する。初級レベルでは、学習者にとって全く未知のことがらを一から説明したり体験させたりしながら、ある程度体系的な知識として積み上げたり、トータルな技能として身につけさせたりする必要がある。そうしなければ、学習が1回限りの断片的な知識や体験に終わってしまい、定着しないからである。したがって、媒介語がうまく機能しないと知識が効率的に伝わらなかったり、文化的な違いなどから新しい体験に拒否反応を起こす学習者がいたりする難しさがあって、学習が軌道に乗るまでには時間がかかる。しかし、一方で、初級レベルについては、学習すべき項目がすでにある程度リストアップされており、教授法や教材、教具なども整ってきている。

それに対して、中級レベルについては、まだ学習項目リストさえも洗い出しが終わっているとは言い難い。このことは日本語能力試験のシラバスを見ても一目瞭然である。日本語能力試験の4級や3級のシラバスに並んでいる文型や表現については、どこの日本語教育機関でも「初級で学習すべき項目」としてある程度の共通理解が得られているように思われるが、2級や1級になると、学習者のニーズ、目的、専門などの属性によってかなり必要度に個人差があり、なかなか統一見解が得られないのではないだろうか。

また、初級の学習項目は、やはり日常的に使用頻度の高い基本的なものなので、学習者は日々の生活の中で、学習したことをすぐに確かめることができ、自分の日本語能力の上達も実感することができる。また、学習者同士、国や文化が多少違って、異文化の中でゼロから新しい体験をしているという連帯感から互いの悩みや問題を分かち合うことによって、ストレスを解消することもできやすい。

それに対して、中級に入るところになると、学習者の困難点や問題は個人差が大きくなるため、学習者間の連帯感も薄れる一方、日本人とも打ち解けて話し合えるほどのコミュニケーション力がまだついていないために、ますます孤立感を強めることが多い。さらに中級以上では、学習する内容が日常的・具体的なことから抽象的なことに移る時期でもあるため、読んだり聞いたりするといった理解に必要な語彙や表現が膨大に増える一方、日々の生活の中で自ら発表する機会はそれほど多くなり、自分の日本語能力の上達をなかなか実感できない。そのため、焦燥感を覚える学習者も少なくないのである。

このように考えてくると、中級前期というのは、初級から中級へと学習がスムーズに移行できるようにするための橋渡しの段階として、非常に重要であると考えられる。来年度から当留学生センターで開講する補講日本語コースのカリキュラム¹が大きく変わる予定であることを踏まえ、今まで当センターで中級前期の日本語コースを担当してきた経験から得た知見をまとめておきたい。当センターでは、初級のテキストとしては、すでに10年以上にわたって『Situational Functional Japanese』²(以下、『SFJ』と略す。)を使用しているが、中級レベルにおいては、『日本語表現文型 中級』以降、いくつかの試用版テキストを作成し、試行錯

誤を続けてきた³。本稿では、特に 2006 年度の「一般日本語 SJ4-1」および「一般日本語 SJ4-2」コース⁴における指導内容を中心に、中級前期における日本語指導のポイントをまとめ、今後の展開のための指針を提示できればと思う。

2. コースの目標と概要

2.1 「一般日本語 SJ4-1」コースの目標と概要

日本語補講「一般日本語 SJ4-1」は、75 分授業で週 2 コマをセットとする、各学期 10 週のコースである。登録者数は、毎学期 20～30 人程度で、非漢字圏学習者も中国・韓国の学習者も混在している。テキストは、『一般日本語 SJ4-1』（1 課～2 課）を使用している。また、聞き取り練習用にテープを作成し、主教材の進度に合わせて適宜使っており、希望する学生はセンターのダビング機で自分のテープにコピーすることもできる。学期中に、筆記による中間テスト（1 課）と期末テスト（1 課～2 課）、および 2 回のオーラルテスト「まとめの活動」の発表を行う。宿題としては、各課のはじめに「文法チェック」、各課のおわりに「宿題」、計 4 回の提出を課している。成績は、中間テストを 20%、2 回の会話の発表を各 20%、期末テストの結果を 30%、宿題の平均を 10%として計算してつける。

「一般日本語 SJ4-1」コースは、日本語を 300～400 時間程度学習して、初級日本語をほぼマスターしている学生のためのコースであるため、基本的な漢字 200～300 字程度は読めることが望ましいが、当センターにおいては、漢字クラスが選沢となっているため、あまり漢字が読めない中級前期レベルの学生もいる。そのため、テキスト『一般日本語 SJ4-1』では、『Basic Kanji Book』vol.1 の前半程度の語彙以外には、すべて振り仮名がふってある。

コースが終わった時には、以下のことができるようになることを目指している。

(1) 自分に関する情報、および他から得た情報を伝えることができる

ユニット 1：初めて会った人と自己紹介する

ユニット 2：相手の行為・状態について聞く（1）くだけた会話

ユニット 3：相手の行為・状態について聞く（2）敬語を使った会話

ユニット 4：伝言する（1）くだけた会話と丁寧な会話

ユニット 5：伝言する（2）敬語を使った会話との使い分け

【まとめの活動】1. 学会の懇親会でフォーマルな自己紹介をする

2. 研究室の友達 / 先輩と先生のことについて会話する

(2) 趣味、特技、希望、予定、印象などを話すことができる

ユニット 1：趣味について話す

ユニット 2：特技について話す

ユニット3：希望・予定・目的を述べる

ユニット4：理由を述べる

ユニット5：印象・感想を述べる

【まとめの活動】1. 留学の目的、専門や大学を選んだ理由、日本での予定、帰国後の予定、日本や大学での生活の印象、趣味、特技などについてインタビューを受ける

「一般日本語 SJ4-1」では、主に、相手との関係を考慮してスピーチレベルを上げ下げすることができるように、くだけた会話表現、「です、ます」の丁寧な会話表現、および敬語表現（尊敬表現、謙譲表現、丁寧表現）などを使いこなせるようにすることを目指す。初級とは異なり、自然なスピードで聞いたり話したりすることを心がけ、特にくだけた会話では、話すスピード、流暢さ、相づちのタイミングなどをトレーニングする。また、目上の相手と話す場合には敬語に切り替える練習、初対面の相手とは初めは敬語で話すが、だんだん知り合うにつれて普通の丁寧な話し方になり、さらに親密度が増せばくだけた話し方に変わるというスピーチレベルシフトの練習などを行う。他から得た情報を伝える表現も練習する。

ここで重点的に扱われる文法項目としては、以下の11項目を立てている。これらは実際には初級で導入されながら定着が難しいものであり、中級前期においては、実際の会話場面の自然な使い方を中心に解説する。

1. 敬語：尊敬表現・謙譲表現・丁寧表現
2. スピーチレベル：くだけた話し方、丁寧な話し方、敬語を使った話し方
3. 情報を伝える表現：「～そうだ」「～らしい」「～とのことだ」「～んだって」
4. 趣味・特技の述語と形式名詞：「こと」「の」
5. 可能表現：「～ことができる」と可能動詞
6. 例示：「～たり～たりする」
7. 条件：「～ても」
8. 希望・意志：「～たい」「～(よ)うと思う」「～つもりだ」
9. 目的：「～ために」と「～ように」
10. 時の表現：「～時」「～間に」「～前に」「～後で」
11. 理由：「～て」「～ので」「～から」など

上記の項目の練習を行いながら、基本的な助詞の用法、動詞や形容詞の活用などについても、正確にできているかどうか、文の長さ、語彙の選び方など、中級にふさわしい話し方ができているかどうかを学習者自身に自己モニターさせ、短文レベルから複文レベルへと、より複雑な

文型表現の組み合わせがスムーズにできるような運用力を伸ばす練習を行う。特に、情報を伝える表現では、普通体につながる「～そうだ」「～らしい」「～んだって」を例に、ナ形容詞や名詞の後ろにくる場合の形の違い（「元氣だそうだ」「元氣__らしい」「元氣なんだって」）などに注意させる必要がある。

「一般日本語 SJ4-1」の受講生には、初日に以下のようなスケジュール表を渡して、授業の進め方、テキスト、音声テープの使い方、宿題などについて説明を行っている。

表1 . 2006年1学期SJ4-1予定

週	月日	曜日	時限	課	テキスト	授業内容	宿題提出日
1	4月24日	月	3	L.1	<準備活動>	オリエンテーションと準備活動	
2	4月26日	水	2	L.1	ユニット1	初めて会った人と自己紹介する	
3	5月1日	月	3	L.1	ユニット2	相手の行為・状態について聞く(1)	L1 G. Check
	5月3日	水					
4	5月8日	月	3	L.1	ユニット3	相手の行為・状態について聞く(2)	
5	5月10日	水	2	L.1	ユニット4	伝言する(1)	
6	5月15日	月	3	L.1	ユニット5	伝言する(2)	L1 宿題
7	5月17日	水	2	L.1	復習	宿題返却・まとめの活動の準備	
8	5月22日	月	3	L.1	Mid-term Test	中間試験(Listening & Grammar)	
9	5月24日	水	2	L.1	Presentation	1課の【まとめの活動】	
10	5月29日	月	3	L.2	<準備活動>	第2課の準備活動	L2 G. Check
11	5月31日	水	2	L.2	ユニット1	趣味について話す	
12	6月5日	月	3	L.2	ユニット2	特技について話す	
13	6月7日	水	2	L.2	ユニット3	希望・予定・目的を述べる	
14	6月12日	月	3	L.2	ユニット4	理由を述べる	
15	6月14日	水	2	L.2	ユニット5	印象・感想を述べる	L2 宿題
16	6月19日	月	3	L.2	復習	宿題返却・Feedback	
17	6月21日	水	2	L.2	復習	まとめの活動の準備	
18	6月26日	月	3	L2	Final Test	最終試験(Listening & Grammar)	
19	6月28日	水	2	L1-2	Final Presentation	2課の【まとめの活動】	

初級から中級に進む学習者がさらに日本語力を伸ばすためには、初級のときのように教師から教えてもらうのを待っていたり、教師に指摘されて間違いを直したりするだけでは不十分で、自分で自分の理解力や表現力、コミュニケーション能力をモニターする力をつける、自律的学習態度を育てることが重要である。具体的には、文法、語彙、発音の正確さ、表現の適切なな

どの問題に気づき、自分自身の言語活動をさらに洗練された中級レベルのものへと磨き上げていく必要性を自覚させることである。そこで、各課を75分授業1回分の小ユニットに分け、以下のような流れで練習を行っている。

- <準備活動> 自分の現在の言語活動を自覚させる
- <聞き取り練習> モデルテープを聞き、自分の現在の言語活動との違い、目標とする中級の言語活動のポイントを確認する
- <表現練習> 目標とする中級の言語活動で使えるようになってほしい文型表現を使った会話をペアで練習する
- <課題練習> 目標が達成できているかどうかをロールプレイの形で確認する

2.2 「一般日本語 SJ4-2」コースの目標と概要

日本語補講「一般日本語 SJ4-2」も、75分授業で週2コマをセットとする、各学期10週のコースである。登録者数は毎学期20~30人程度で、非漢字圏および漢字圏の学習者が混在している。テキストは、『一般日本語 SJ4-2』(1課~3課)を使用しており、聞き取り練習用にテープを作成し、主教材の進度に合わせて適宜使っているほか、希望する学生はセンターのダビング機で自分のテープにコピーすることもできる。学期中に、筆記による小テスト2回(1課と2課)と期末テスト(1課~3課)、およびオーラルテスト「まとめの活動」1回と、最終のスピーチ発表1回を行う。宿題としては各課のおわりに「宿題」を計3回課している。成績は、小テストを各10%、会話の発表を20%、最終のスピーチ発表を20%、期末テストの結果を30%、宿題の平均を10%として計算してつける。

このコースが終わった時には、以下のことができるようになることを目指している。

- (1) 目上あるいは同等、目下の人に依頼をしたり、依頼を受けた場合に引受けたり、断ったりすることができる
 - ユニット1：話を始める
 - ユニット2：状況を説明する
 - ユニット3：依頼する
 - ユニット4：引き受ける・お礼を言う・断る
- 【まとめの活動】1. 指導教員に、今、困っている状況を説明して依頼する
 - 2. 友達からの依頼を理由を言って断る
- (2) 目上の人に許可を求めたり、人から許可を求められたり頼まれた場合に条件を出したりすることができる
 - ユニット1：許可を求める(1)
 - ユニット2：許可を求める(2)

ユニット3：許可求めや依頼などを理由を言って断る・助言・対応を述べる

ユニット4：条件を出して、引き受ける

【まとめの活動】1. 目上の人からの依頼を条件を出して引き受ける

2. 後輩からの依頼 / 許可求めを助言を言って断る

(3) 自分の国・町を紹介する

ユニット1：パンフレットや写真を説明する

ユニット2：観光・地理・産業の特徴を紹介する

ユニット3：比較する・たとえる

【まとめの活動】1. 自分の国、町、あるいは自分の好きな場所について3分間程度のスピーチを発表する。

「一般日本語 SJ4-2」では、前半は主に、相手との関係を考慮してスピーチレベルを上げ下げしながら、相手に頼みにくいことを依頼したり、許可を求めたりできるようになることを目指す。同時に、目上の人からの依頼や誘いを引き受ける場合、あるいは断る場合の対応の方法についても練習する。この段階では、特に、依頼したり許可を求めたりする相手との人間関係によって、失礼にならない話し方を工夫するなどの配慮にも意識を向けながら対応できるようにするための練習を行う。特に目上の人と話す場合には、比較的長い状況説明や理由、条件などを流暢に言えるようにトレーニングし、非言語行動にも注意を払う必要がある。

また後半には、自分の国や町を紹介する3分程度のスピーチ発表を行うことを課題とする。スピーチ発表という改まった場面での言語活動を通じて、自然な受身表現や使役表現の使い方を練習することができる。

ここで重点的に扱われる文法項目としては、以下の17項目を立てている。

1. 他動詞と自動詞
2. 条件：「～ても、」
3. 状況説明：「～んです」「～んですが」「～んですけど」
4. 待遇表現：「お／ご～いただく」「お／ご～くださる」
5. 依頼表：「お～いただけませんか」「お～もらいたいたんですがなど」
6. 理由・言い訳：「～し、～し、」「～し、ので、」「～もんですから」
7. 謙譲表現：「お／ご～する」
8. 許可を求める：「～てもよろしいでしょうか」「～させてもらえませんか」
9. 条件をつける：「～なら、いい」と「～たら、かまわない」
10. 助言：「～ばいいんじゃないですか」「～たらどうですか」
11. 経験：「～たことがある／ない」

12. 直接受け身：「～は～に(よって)～(ら)れる」
13. 連体修飾：
14. 「として」の使い方
15. 比較：「～のほうが～より～」「～は～ほど～(negative)」
16. 程度を表す表現：「～ほど」「～ぐらい」
17. 比喩・様態を表す表現：「～ようだ」「～みたいだ」「～そうだ」

特に、自動詞と他動詞、受け身表現と使役表現は、初級で形は学習するものの、いつどのように使われるのかを実感できていない学習者が多い。例えば、困っている状況を説明して教えてほしいと依頼する場面で、「データを集めたいんですが、なかなか集まらないんです。」「チャンネルを変えたいんですが、いくらボタンを押しても、変わらないんです。」のような練習をすると、他動詞と自動詞の使い方が実感できる。また、目上の相手に丁寧に許可を求めるような場合、「～させていただけませんか」のように使役表現が使われたり、自分の国や町の紹介で、「ここは、10年前にオリンピックが開かれたスタジアムです。」のような直接受け身を使った連体修飾がごく自然に使われたりする。比較の表現も初級で一度は導入されるものであるが、「～は～ほど～ない」のような表現は、なかなか使いこなせない学習者が多い。さらに、「まるで～のようだ」「～みたいなN」などの比喩の表現になると、中級になって初めて習うという学習者が多い。それが国や町の紹介をする場合には、自然と日本の場合と比較したり、わかりやすく喩えて説明したりする必要が出てくるため、学習者は実際の必要に即して練習を楽しみながらスピーチの準備をし、最終スピーチでは、かなりいろいろな比較や比喩の表現が使えるようになる。

「一般日本語 SJ4-2」の受講生は、初日に以下のようなスケジュール表を渡され、授業の進め方、テキスト、音声テープの使い方、宿題などについて説明を受ける。

「SJ4-2」コースにおいても「SJ4-1」コースと同様の流れで授業を行っており、自分で自分の話し方、表現力を自己モニターさせているが、「SJ4-1」コースでは、テンポのよい会話運びを練習させるために、1人に発話させる文を比較的短くおさえているのに対して、「SJ4-2」コースでは、1人でより複雑で長めの文を既習の文型表現をうまく組み合わせ流暢に話せるようにすることを目標としている。そのため、3課の「まとめの活動」では、1人で3分間スピーチをするという形をとっている。

のコミュニケーション能力と照らして、どこまでできているか、どこが足りないのかをまず自覚させ、その後に、学習者にとって必要と思われる場面での会話をテープで聞かせる。スピーチレベル、人間関係を把握させ、さらに重要部分のディクテーションによって、聞き取りを精緻化する。その後、繰り返し練習、シャドウイング練習などの発話練習に進み、各ユニットで習う文型表現を使った対話練習、ペア活動、そして各ユニットの終わりには、ペアでロールプレイをさせることによって目指すコミュニケーション能力が達成できているかどうかをチェックする。さらに、課の終わりには、総合的な流れのロールプレイによって、全体的な達成度をみる。

授業は口頭練習を中心に進むが、文法的に必要なと思われる項目については、【解説】のページを読むように指示している。クラスの特徴としては、いろいろな国の学習者、若い学類の短期留学生から、大学院進学を目指す研究生や大学院生、時には研究者までが20~30名混在しており、興味・関心も多方面にわたっていることが挙げられる。したがって、1人1人の学生の言語活動のタイプも授業参加度も異なるため、学生同士でペアを作らせたり、日本人学生のボランティアに参加してもらったりして、コミュニケーション・ギャップを使ったペア活動やグループ活動などをさせると効果的である。また、個人差はあるものの、日本語の初級の文法的知識については既習であるが、実際の場面での運用力が低い、あるいは知識そのものが不正確である、などの問題を抱えている受講者が多いため、既存の知識を再確認しながら活性化させつつ、実際の日本語運用のスピードや自然さをトレーニングして身につけさせることを目指す点が、中級前期クラスの特徴であろう。以下に具体的な授業の進め方および指導のポイントと、指導例を示す。

3.1 準備活動

<準備活動>の目的は、まず受講者に、これから始まる中級前期の授業の目標や内容に関するオリエンテーションをしながら、学習者自身が「知っていること」と「できること」は違うということを実感させることである。

プレースメントテストでこのレベルに配置された学習者の中には、テキストの【解説】ページの項目を見て、「ああ、こんなことなら、もう知っている。習ったことがある。自分はもっと上のレベルであるはずだ」と主張する者がいるが、そういう学習者にかぎって、<準備活動>で状況を与えてロールプレイをさせると、活用や助詞を間違えたり、フォーマルな場面でも平気で普通体を使っていたり、逆に友達同士という設定なのに、丁寧な口調から抜けださずにいたりする。もっとひどい場合は、上記のような文句を英語で堂々と主張する者もいる。しかし、なるべく文化圏の異なる学習者同士をペアにして、「与えられた状況にふさわしいと思われる会話を、2人で日本語で相談しながら、作ってみなさい」というと、どの程度日本語でコミュニケーションができるかがわかり、また自分の理解と他の学習者の理解がいかに違う

かを自覚することになる。

10分程度の話し合いの間、教師や日本人学生(上級の留学生の場合もある)ボランティアが各ペアを見回って、必要な語彙を与えたり、学習者からの質問に答えたりする。

その後、各ペアに自分たちの作った会話を実演発表してもらい、みんなでフィードバックを行う。自分の間違いにはなかなか気づかない学習者も、他人の間違いには気づくことが多く、クラス全体でフィードバックするうちに、徐々に「知っている」と思っていたことが実はあまり正確でなかったこと、知っていてうまくできないことがあるということ、などに気づきはじめるのである。特に、初級で文法や発音の正確さだけを学習してきた学習者にとっては、「どんな場面でどんな相手に対して話すのかによってスピーチレベルを変えることができるのが中級だ」という説明は、説得力があるようである。

3.2 「聞いてみよう」

各ユニットのはじめに、テープで3～4つのモデル会話を聞く。1回聞いただけで、スピーチレベルなどから話している2人の人間関係がわかるかを口頭でチェックする。次に、テキストの「聞いてみよう」のページにある会話テープの SCRIPT を見て内容を確認するが、そのユニットで学習すべき表現を含む一部分がブランクになっており、学習者にディクテーションをさせる。なんとなくわかったつもりになっている細部を書かせてみると、特に縮約形などは全く聞き取れていなかったり、違うことばを当てはめて聞いていたりすることがある。部分的ディクテーションによって聞き取りの精緻化を図ることができる。話す内容が明らかになったところで、テープの後について、繰り返し練習とシャドウイング練習を行う。初級では繰り返し練習が主流であろうが、繰り返しだけでは、長い文になると、話すスピードが落ちて来てしまう傾向がある。中級にふさわしいスピードを実感させ、身につけさせるといった発話の流暢さの強化のためには、シャドウイング練習が効果的である。ただ、確実にできるようになるまで練習を続けるだけの時間が授業内ではとれないため、教師が手本を示し、1回全体でやってみて、あとは各自テープを聞いて練習するように指示するに留まっている。

3.3 「練習してみよう」

「一般日本語 SJ4-1」および「一般日本語 SJ4-2」では、学習者の個人差に対応するため、全体に説明したり、指示を出したり、最後にフィードバックしたり確認したりする以外は、できるだけ学習者同士のペア活動、あるいは日本人学生ボランティアに入ってもらってグループ活動によって練習を行うことを想定している。できるだけ異なる文化圏の学生同士をペアにすると、上手に助け合い、また日本語でコミュニケーションをしながら、課題を達成することができる。教師は適宜、グループ間を回りながら、個別の問題(発音や文法の間違いの矯正、発話のスピードアップの訓練、学習者の質問に答えるなど)に対応するようにしている。ただし、

学期によっては、学習者の文化圏が偏っていたり、日本人学生ボランティアが集まらなかったりして、思うようなクラス運営ができない場合もある。

3.4 「話してみよう」と「まとめの活動」

ペア活動およびグループ活動を通じて各ユニットで練習した成果を発表するのが「話してみよう」であり、全部のユニットを終わったところで、全体的な流れをできるだけ実際の運用に近い形で発表するのが「まとめの活動」である。

「一般日本語 SJ4-1」コースでは、「話してみよう」も「まとめの活動」も役割と状況を与えて、会話をさせる形式になっている。このコースでは、相手によるスピーチレベルの切り替えや会話のやりとり、あいづちなどをテンポのよく進めさせるために、1人に発話させる文を比較的短くおさえており、最終的な「まとめの活動」の主眼は、「習った文型表現を使って中級にふさわしい内容の会話が実現できているか」の他に、「相手にとって適切なスピーチレベルで話せているか」「応答がスムーズか」などの点もみることになっている。「まとめの活動」では、教師と日本人学生ボランティアが手分けをして会話の相手を務め、その様子をビデオに収めたものを教師が評価する。

それに対して、「一般日本語 SJ4-2」コースでは、前半は依頼や許可求めなど、比較的目上の人に対して敬語を使って丁寧に、複雑で長めの文を既習の文型表現をうまく組み合わせて流暢に話せるようにすること、後半はスピーチをすることを目標としているため、「話してみよう」にも会話型の課題と、独話型の課題の2つが用意されている。

1回目の「まとめの活動」は、「SJ4-1」と同様、「習った文型表現を使って中級にふさわしい内容の会話が実現できているか」「相手にとって適切なスピーチレベルで話せているか」「応答がスムーズか」によって評価されるが、2回目の「まとめの活動」は最終スピーチとなるため、「スピーチ内容の面白さ」「話し方(紙を見ず、スピーチにふさわしい方法で話せているか)」「習った文型表現の使用」「文法的適切さ」「発音などの正確さ」などによって評価される。また、最終スピーチでは、教師が評価を行うだけでなく、クラスを手伝ってくれる日本人学生ボランティアにもスピーチ評価を依頼することによって、一般の日本人学生に学習者のスピーチがどのように聞こえるかというモニターも行っている。また同時に、受講生自身にもスピーチ評価シートを渡して、他の受講生のスピーチ評価をさせている。ただ自分が準備したスピーチを練習して発表するだけでなく、他人のスピーチを聞いて評価することにより、学習者のモニター力がどの程度ついているかをみることもできるのではないかというねらいである。

3.5 宿題とフィードバック

宿題は、「一般日本語 SJ4-1」と「一般日本語 SJ4-2」とで、異なる方法で課している。「一般日本語 SJ4-1」では、「文法チェック」 【解説】 授業 復習(【解説】) 「宿題」 フィ

ードバック(【解説】) テストという流れで、既習の学習内容の確認チェックから始めるが、「一般日本語 SJ4-2」では、授業 復習(【解説】) 「宿題」 フィードバック(【解説】) テストという流れで、復習型になっている。

「一般日本語 SJ4-1」で各課のはじめに「文法チェック」を課すのは、それぞれの問題が【解説】のページと対応する内容になっているので、学習者は4肢選択の問題に答えながら、わからなければ【解説】のページを読んで学習内容を確認することができるようにとの配慮からである。さらに、各課の学習が終わったところで、そこで習った文型や表現の用法を復習・確認するための記述式の「宿題」を課す。「文法チェック」の方は、学習者に「知っているつもりのこと」と「実際に知っていること」のギャップを自覚させるために効果があり、「宿題」は習ったことが確実に身につけているかどうかを確認するために有効である。

「一般日本語 SJ4-2」は、「一般日本語 SJ4-1」と同時に取ったり、その後で履修する学習者もいることから、「文法チェック」がなくても【解説】を参照する習慣がつけられると考え、また課の数が1つ多いために「文法チェック」を入れる余地がないという実情もあって、記述式の「宿題」のみとなっている。「一般日本語 SJ4-1」より多少日本語力のある学習者がいることも多いため、単なる復習・確認のための宿題だけではなく、記述問題に自分で考えて作文する自由度を増やすなどして、学習者の自己表現力を伸ばす工夫もしている。特に3課の宿題には、最終スピーチの原稿作りが含まれており、スピーチに使われる表現や語彙の豊富さ、文法の正確さなどを、宿題の一部としても評価するようにしている。

4. まとめと今後の課題

以上みてきたように、中級前期における日本語指導のポイントをまとめると、次のようになる。

- (1) 「知っていること」と「できること」の違いを認識させる (<準備活動>)
- (2) おおまかな聞き取りと、精密な聞き取りの両方を訓練する(「聞いてみよう」)
- (3) 発話のスピードおよび流暢さの強化(シャドウイング練習)
- (4) 相づちのタイミングやスピーチレベルの切り替えなどの練習(ペア活動)
- (5) 既習の文型を組み合わせたり、中級らしい表現を使ったりして、長い発話ができるようにする

中級の目標として、学習者はともすると(5) 中でも「中級らしい表現」だけを求めたがる傾向にある。しかし、「中級らしい表現」というのがそんなにあるわけではない。実は、初級で一度学習していても十分に使い方がわかっていないもの、まだ習熟していないものを使いこなせるようになること、またそれらをうまく組み合わせて長い発話ができるようにならなければ、せっかく習った「中級らしい表現」も活かせないのである。そのためには、(1) のような自己モニター力をつけることが最も重要であると考えられる。それが、現在、自分には何

ができて、何ができていないのかを自覚し、自分でそうなりたいというモデルを想定して、それに向かってトレーニングを積むという自律的学習の姿勢につながる。また、運用力、実践力をつけるためには、(2)のように必要に応じて聞き方を変えること、(3)のように聞きながら繰り返すことによって、自分の発話スピードを上げ、長い台詞も流暢に言えるようにすること、(4)相づちのタイミングやスピーチレベルの切り替えなどの練習が不可欠である。特に(4)のためには、ペアおよびグループでの活動を通じて学生間のコミュニケーションが促進されるのが最も効果があると思われる。今後も、学生の自律的な学習態度を引き出し、また学生同士が互いに協力して学習効果をあげられるような指導の工夫を重ねていく必要がある。日本人学生ボランティアの活用の制度化も望まれる。

注

1. 筑波大学における日本語コースの歴史については、堀口(1986)、当センターにおける日本語補講コースの変遷については、加納(2004)を参照されたい。
2. 筑波ランゲージグループ(1991)『Situational Functional Japanese』Notes & Drills vol.1 ~ vol.3, 凡人社
3. 当センターでは、寺村秀夫編・筑波大学日本語教育研究会(1983)『日本語表現文型 中級』I & II(イセブ出版)が内容的に古くなったことなどから、1996年ごろから市販の中級教材を使用した時期もあったが、やはり初級からの移行がスムーズにいかず、プリント教材などを使ってしのいできた。その後、以下のような中級前期用の日本語教材を開発、使用してきた。
 - ・小口叔枝・金久保紀子・加納千恵子・衣川隆生・戸田貴子・長能宏子(1999)『日本語中級 文型表現練習Ⅰ』(1-4課)及び『日本語中級 文型表現練習Ⅱ』(5-8課)筑波大学留学生センター試用版(2000年に改訂版)
 - ・加納千恵子・衣川隆生・長能宏子・金久保紀子(2004)『一般日本語 SJ4-1』(1-4課)、『一般日本語 SJ4-2』(1-3課)、及び『一般日本語 SJ4-3』(1-2課)筑波大学留学生センター試用版
 - ・衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子(2005)『一般日本語 SJ4-1』(1-2課)、『一般日本語 SJ4-2』(1-3課)筑波大学留学生センター試用版
4. 2006年度現在のテキストは、衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子・小池康(2006)『一般日本語 SJ4-1』(1-2課)及び『一般日本語 SJ4-2』(1-3課)筑波大学留学生センター試用版であり、留学生センターの補講日本語コースは、以下のようなレベルからなっている。

表3 2006(平成18)年度留学生センターの日本語補講コース概要

コース名	クラス	レベル	コマ数	対象	主教材・内容
一般日本語 コース S Jコース	SJ1-1	ゼロ初級	週4コマ×10週	短期留学生 および	『SFJ』 vol.1(L1-4)
	SJ1-2	初級前期	週4コマ×10週		『SFJ』 vol.1(L5-8)
	SJ2-1	初級中期	週4コマ×10週		『SFJ』 vol.2(L9-12)
	SJ2-2	初級中期	週4コマ×10週		『SFJ』 vol.2(L13-16)
	SJ3-1	初級後期	週4コマ×10週		『SFJ』 vol.3(L17-20)
	SJ3-2	初級後期	週4コマ×10週		『SFJ』 vol.3(L21-24)
	SJ4-1	中級前期	週2コマ×10週		『一般日本語SJ4-1』
	SJ4-2	中級前期	週2コマ×10週		『一般日本語SJ4-2』
選 択 漢字クラス	K0-1	ゼロ初級	週1コマ×10週	研究留学生	ひらがな・カタカナの練習
	K0-2	かな既習	週1コマ×10週		カタカナの練習・漢字入門
	K1-1	漢字0～150字	週1コマ×10週		『BKB』 vol.1(L1-11)
	K1-2	150～250字	週1コマ×10週		『BKB』 vol.1(L12-22)
	K2-1	250～350字	週1コマ×10週		『BKB』 vol.2(L23-35)
	K2-2	350～500字	週1コマ×10週		『BKB』 vol.2(L36-45)
	K3-1	500～650字	週1コマ×10週		『IKB』 vol.1(L1-4)
	K3-2	650～800字	週1コマ×10週		『IKB』 vol.1(L4-7)
	K3-3	800～1000字	週1コマ×10週		『IKB』 vol.1(L7-10)
目的別・ 技能別 クラス	レベル5	中級後期	各週1コマ×10週	短期留学生 研究留学生	各学期平均7～8科目
	レベル6	上 級	各週1コマ×10週		各学期平均7～8科目

『SFJ』=筑波ランゲージグループ 『Situational Functional Japanese』 凡人社

『BKB』=加納・他 『Basic Kanji Book』 凡人社

『IKB』=加納・他 『Intermediate Kanji Book』 凡人社

参考文献

- 加納千恵子(2004)「日本語教育の多目的化およびモジュール化 2004年度留学生センター日本語プログラムの再編報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20号:93-108
- 堀口純子(1986)「筑波大学における日本語教育その十年」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』1号:89-109